広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第53号　2004　127－136

渥美半島方言助詞の研究（Ⅲ）

江　端　義　夫

(2004年９月30日受理)

A Study of Grammatical Particle on the Dialects in Atsumi Peninsula in Japan: the third report

Yoshio Ebata

In this paper, the author has descrived the various grammatical particles on the dialectal sentences in Atsumi Peninsula of Aichi prefecture in Japan. These particles are varied in five kinds. The particles of them are named as a Kaku, Kakari, Fuku, Setsuzoku and Bunmatsu. This third report will descrive the sentence-ending particle of them, that is called a BUNMATSUSHI.

We already have a steady system of systematic idea on the description of the sentence-ending particle. That was shown us by the Dr. FUJIWARA Yoichi. It has a feature of historical and morphological classification.

Now, I will have an another method of classification of the sentence-ending particle. That is a framework of conversation network. It is mentioned the relation with the frame between the speaker and the hearer.

Based on the conversational network , the name of the sentense-ending particles were descrived .

We will say two kinds of them. That one is calling-particle, and the other is a oneself-satisfied particle. This scale is the author's original idea.

We will be able to show a systematic descriptive model on the whole dialectical particles of a certain society in Japan. This may be said to become one of the typical example of them.

Key words : Atsumi Peninsula, Dialectal Particle, Descriptive Study, sentence-ending particle
キーワード：渥美半島，方言助詞，記述的研究，文末詞

第六部　文末詞叙法

はじめに

文末詞は，二つの機能に分類される。一つは，語りかける相手を必ず必要とするものである。発話の後に，相槌を期待するか，または応えを要求するものである。典型的なものは，疑問形を形成する文になる。すなわち，聞き手に対しての働きかけを認めるものである。見過ごしたり，放置したりすることは，普通には許されないものである。いわば，円滑なコミュニケーションを醸成するための文末詞である。会話という複数の人間関係が入り組む綾を感じさせる文末詞が，これである。会話は話し手と聞き手とのキャッチボールであるから，投げかけと差し戻しの交換であり，談話よりも会話が適切な用語と言える。一般的には，談話という術語が普及しているけれども，「談話を読み上げる」などの言い方が可能なように，談話は文書をも含意するので，できれば会話の方が適切であろう。とにもかくにも，複数の会話という形式の際に出現する文末詞のことである。

以上の機能を担う文末詞が「喚起性文末詞」である。このような命名には，深い意味がある。喚起性というのは，相手に対しての働きかけを持つという意味である。話繋詞という命名を，かつて試みたことがある。会話を繋ぐという意味で，使用した。喚起性という意味と話繋という意味とは類似のことと考えている。語り手と聞き手との相互扶助を意味している。呼べば応えるという緊密な言葉のやりとりをとらえたものである。しかし，語り手に視点を置いて，聞き手の反応を期待することになっている。相互というのでは

ない。話し手の能動的な語りかけになっていて，その事態にどう応えるかというのが，課題になっている。そのような視点で考えたのが，この「喚起性文末詞」である。

さて，この「喚起性文末詞」に対立した概念を示すのが，「主体性文末詞」である。主体性文末詞というのは，聞き慣れない術語である。これは，陳述と言ってもよいし，述定と言ってもよい。語り手がひとり語りするのをよしとするものである。つらつらと自分の思いの丈を述べるものである。その述懐の様を捉えて命名したのが，この術語である。これは，相手がいてもよいし，ひとり語りでもよい。それは，必ずしも相手の意見を即座に要求するものではないことを意味している。要は，話し手が話し手の気随に述べることを主なる機能としたものを言う。したがって，相手に確認を求めたり，相槌を求めたりするような文末詞ではない。あくまでも，自分の意志を表明することが基本であり，述べ終わったことを知らせる指標としての文末詞がこれである。したがって，「主体性文末詞」は，自己本位の文末詞だということができる。

以上の二つを大きく，見いだすことができる。従来，文末詞の記述では，歴史的な成立過程を重視するあまりに，意味を軽視してきた。しかし，会話の成立という観点で文末詞を見直すと，以下に述べるような会話機構を重視した新しい考え方が発見できる。

第一章　喚起性文末詞

第一節　話繋文末詞

1．「カ」類文末詞

「喚起」性とは，話し手の意図に，既に聞き手の反応を求める記号が含まれていることを意味している。話し手の発言内容を述べきることが目的であるというのではなく，聞き手の応えを期待するものである。相手への顧慮が前面に出てきた文末詞だということになる。

その典型的なものが，疑問の「～カ」である。「～カ？」と聞かれたら，是非を応えなくてはならないのが，日本語の習慣になっている。いわば，このような例で示されるように，自他の関係維持を目的にした繋ぎの文末詞とでも言うべきものが，喚起性文末詞であり，話繋文末詞である。以下，文末詞の用例は，豊富に見られるけれども，紙幅のつごうで，各語句に一例ずつを掲げることにしている。ただし，用例が多くなくては，文末詞の働きを十分には説明しきれない場合には，数例をのせた。できれば，各語句に30文例ずつくらい，のせたいところである。

(1)「カ」

○デテ　コース　カ。出てこようかねえ。老女→青男，小中山

上の例では，「ス」が意志の助動詞「むず」であるために，文意が必ずしも，容易には取り難いかも知れない。話し手が，おもむろに腰をあげて，出席してみようかね，と周囲の者につぶやく。ひとり語りふうなのだが，文末に「～カ」があるので，聞き手は応える義務を感じないわけにはいかない。意志の助動詞で述べられているので，さえぎる発言は，しにくいであろう。「うん」とか「そうそう」とかの曖昧な応答の返事で済ませることになる。ただし，上の例文そのままで，抑揚だけを強めれば，反語の意味にもなる。こうなると，文末詞の「カ」は，疑問ではなくて，反語として機能する。すなわち，「出てみるべきか，いや，出てみる必要などありはしない。」という意味になる。端的な言い方だけに，厳しい言い方になる。文末詞の「カ」は，疑問にも反語にも解釈が可能である。場面しだいだということである。

(2)「カイ」

○イエ，ノコットル　カイ。いいえ，残っているかねえ。老女→青男，小中山

「カ」がぶっきらぼうな感じなのに対して，「カイ」は，同等以下への親近感をこめた言い方として，通用している。男女を問わず，「カイ」は，母音の[i]の持つ歯切れのよさによるものと言うべきか，丁寧さとは異質ながら，頻度が低くない。

(3)「カイノー」

○トコロニヨッテ　チガウ　カイノー。所によって，言い方が違うかねえ。老男→青男，波瀬

「ノー」には古いイメージがある。したがって，「カイノー」という文末詞は，老人の男子が使うのにふさわしい。「カ」があれば，必ず疑問の問いかけになるが，「カイノー」と複合形にすれば，心情の綾が深まる。「カイノー」の方が，「カイナー」よりも丁寧になる。それは，「ノー」が「ナー」よりも，かしこまったものだという伝統への信頼に基づく。古くさい「ノー」が新しい「ナー」よりも敬意が高いのである。

(4)「カイナー」

○マンダ　サカン　カイナー。まだ，咲かないかねえ。老男→青男，波瀬

先にも記したが，「カイナー」は「カイノー」よりも品位が劣る。ひとり語りの趣がある。他人に対しての言い方であれば，古くさくても，土地人は，ゆかしさ

に裏打ちされた「カイノー」を使う。ただし，使用場面の雰囲気にもよるであろう。きさくな感じを演出しようとすれば，「カイナー」が好まれることも確かである。

(5)「カネ」

○ツブシヤー　ツブレル　カネ。潰しなさるならば，潰れるかね。中女→青男，福江

「ツブシャー」でなくて，「ツブシヤー」である点に注目したい。「ヤー」には，「ヤス」という助動詞の働きが見える。単純に「ツブシャー」であれば，「潰すならば」であろう。しかし，これは，「潰しなさるならば」という敬語助動詞の意味が見えることになる。老人でなくて，中年の言い方であってみれば，納得がいく。

(6)「カヤー」

○アタラン　カヤー。イチマンエン。当たらないかねえ。一万円。少女→少女，小中山

「カヤー」という文末詞は，仲間同士の気さくな感じで使用される。ざっくばらんな雰囲気を醸し出す。これは，丁寧な心意を作らない。

(7)「カン」

○タカ　ナイ　カン。値段が高くないかね。老女→老男，田原

「カン」は敬意の高い上品な人間関係で使用される。「N」音の優しい響きが好まれる。年層を超えて，誰に対しても，上位の待遇品位を作り出す。

(8)「カンホイ」

○マチャー　ナイ　カンホイ。町は無いかねえ。中男→老男，田原

「～ホイ」と呼びかける文末詞の特異さは，注目してよい。「おいおい」と相手に呼びかける際にも，当該地方では，「ホイホイ」となる。だから，「カンホイ」という文末詞も特別なものとは言えないのである。

(9)「カイアンタ」

○フタリダッタ　カイアンタ。ソヤー　エー　ネー。二人だったかね。それは，良かったね。中女→中女，赤羽根，

代名詞の「あんた」が文末詞として使用されて，呼びかけ語になっている。「カイアンタ」というような複合形になっている。「あんた」の意味は薄い。しかし，喚起されていることの呼びかけの意味には注意しなくてはならない。

(10)「カシャン」

○ドー　シー　カシャン。どうしようかしら。老男→老男，中山

「どうしよう」という言い方が，「どうしー」となっている。自在な語形の変容に驚く。「しよう」が「しー」と成っていても，聞き手は決して誤解しなくて，「どうしよう」の意味で受けとめる。そこが興味ぶかい。また，「かしら」も「か，知らぬ」であり，複文を承けた言い方である。それらが，一体的な文末詞になり，「カシャン」となる。誠に自由で奔放なのがおもしろい。

(11)「ケ」

○サキオトトイダッタ　ケ。一昨々日だったかね。老女→青男，小中山

上の文例の「ケ」は，過去の助動詞の「ケ」ではない。過去ならば，「一昨々日　ケ」のようになろうし，「一昨々日だっケ」のようになるであろう。しかし，「～た」の後を承けて「ケ」とある。完全に文末詞の「ケ」である。「かしら」にあたるもの言いである。

第二章　愛想文末詞

はじめに

「愛想」文末詞という呼称は，日本語の特質を明晰に特色だてるものとなっている。会話の場面で，相手が打つ相槌をしきりに確認しながら，話を展開していくのが，日常の会話である。「あのね，そのね，これはね，ええっとね，…」のように，文末詞「ネ」が頻繁に使用される共通語の会話を想像すれば，他の地域での会話についても，およそ見当がつくであろう。このような文末詞の使用状況を形態本位に命名して，間投詞法と言うのがよいか，それとも，談話単位に統括的な意図を汲み取って，文末詞の反復法と見た方がよいか。筆者は，後者の方がよいと考える。文の規定が問題になるけれども，ひとまず，それは後の課題として，ここでは，頻用される「ナ」行音などの文末詞の取り扱い方について判断したいと考えている。

先にも述べたが，「ナ」行音の文末詞だけとは限らないけれども，特に「ナ・ニ・ヌ・ネ・ノ」の音に関わる文末詞は，日本全国で極めて盛んに聞かれる。鼻音の効果とも言われる。ハミングがどうして，日本人に好ましい響きと感じられるのか，定かでない。文末の言い切りに，わざわざ，N音を響かせて，口腔鼻音に仕立てる一般性は，日本人だけの特性か，或いは人類普遍の真理なのか，分からない。ともかくも，N音の文末詞が，相手に敵意を醸し出さないことだけは，確かである。

そこで，「ナ・ニ・ヌ・ネ・ノ」系の文末詞を引っくるめて，「愛想」文末詞と命名してみてはどうか，と提案することにしたのである。相手からの好ましい反応を期待するために，「ナ」行音の文末詞を頻りに使用するとすれば，背後に，敵意を抱いてはいないことを提示する意志が明白にある。出来れば，好意的に対応して欲しい，という希望もある。このような対話の心理が内在するのであるからには，「愛想」文末詞と定義した方が，的確ではないか，と思量するのである。この「愛想」が，全ての当該文末詞の文例について，説明可能だとは言えない。しかし，典型的な例示にはなることであろう。

従来，創始者の藤原与一博士は，感声的文末詞と定義なさり，後は五十音図で「ナ」行音文末詞と説明なさっていた。意味は多様であり，使用された文例ごとに異なる。したがって，意味からの規定は無理とお考えになったようである。しかし，「会話機構」そのものをとらえて，コミュニケーションにおける機能を説明する用語として「愛想」という語句を選択することは，生産的である。談話や会話という大きな単位でものごとを思考する次元に立つことによって，今まで感声的文末詞と呼んできた文末詞を，「愛想」文末詞と言い換えることを提案したい。ただし，感声的文末詞という呼称には，これらの文末詞が生成した原初性も考慮した命名なのだ，との反論が聞かれそうである。しかし，それも，「会話機構」のこととして，再検討していけば生産的だと考えている。

第一節　「N」音文末詞

藤原博士が「ナ」行音文末詞と呼称していらしたものを，「ナ」行音にこめられた音は「N」音なので，このN音だけを取り出して，N音文末詞と言うことにしたい。最も根源的に，N音の効果を問題とする。

(1)「ネー」

○ソース　ネー。ロクヒチカイワ　ヤルガ　ネー。そうだねえ。六七回はするけれどね。中男→青男，堀切

男も女も，少しあらたまった場面を意識すれば，「ネー」になる。特に中年よりも若い年輩には，「ネー」が必須の文末詞である。老年には，まだ「ノー」が使えるけれども，少し若い層になると，「ノー」の使用に違和感を抱く者もいる。

(2)「ネーホイ」

「おい」とか「ほら」とかと他人に声をかける言い方が，渥美半島では，「ホイ」である。したがって，文末詞の「ネー」との複合により，「ネーホイ」という変わった文末詞が生まれる。この「ネーホイ」を聞けば，いかにも，渥美半島地方，豊橋市地方のことばだ，という気分を感じとることができる。

○アンナー　ネーホイ。ハッテ　コマッタ　ニー。あれはね。張って困ったねえ。中女　→中女，赤羽根

「ネーホイ」という文末詞の興味ぶかさは注目される。それにも増して，稀少で注目されるのが，上の文例での文末詞「ニー」である。

「ネーホイ」は，必ずしも丁寧なものではない。目上への言い方は無い。同等か目下への言い方に限られている。気軽さという感じで，軽快に声かけができる間柄での言い方である。

(3)「ネン」

○オロイトク　ネン。上から下へ降ろしておくよ。老女→中女，赤羽根

文末詞の「ネン」は，愛知県東部の特色として有名である。この「ネン」は，近畿地方の「それはそうやネン」などの「ネン」とは意味が異なる。近畿地方の「ネン」には，抗議めいた気分のねじれが見られる。しかし，渥美半島の「ネン」には，抗議めいた気分のねじれは無い。親しみのこもった感じで，少し強気になって，念押しをするくらいの使い方である。

(4)「ノ」

「ノ」は，男言葉と言えるかも知れない。丁寧な意識で使われるけれども，剛毅なイメージがあるので，女はこれを使いにくがる。たとえば，老女は「ノ」を使いたい場面でも，たいてい，ふみとどまり，丁寧な意識で，「ネ」を使うことになる。「ノ」を使いたい時には，同性に使われる。女が女に使うことはできる。しかし，これを，男は男にも女にも年下にも使える。

「ノ」には古くさいイメージがある。丁寧なのだが，使いにくいのである。

○カジガ　アヤガロータ　ノ。火事があったものだね。老男→青男，田原

過去のことを思い出して，回顧談として語る場合に，「あやがろうた」などのアスペクトで表現する。初めて耳にした時には，驚いた。しかし，慣れるにつれて，愛知県の各地にもこれの見られることが分かってきた。

「ノ」は男同士の気の置けない会話には，ふさわしいものだと言える。特に年下への言い聞かせるような話題では，まことに好適である。

(5)「ノーホイ」

○ソー　ナイデ　ノーホイ。それほど無いからねえ。老男→青男，田原

先にも，呼びかけ語の「ホイ」を説明したが，文末詞に添加して，自在に複合形を作る形態素なのである。もともとは，感動詞の「ほい」である。

(6)「ノイ」

○ガッコーニ　ヨッテ　ノイ。学校によりけりでね。老女→青男，豊橋市伊古部町

「ノイ」は余り多く聞くことがない。先に「ノ」は男言葉だと言った。女が「ノ」を使いにくいのであれば，どうするか。[ｉ]音の繊細な優しさにすがって，「ノイ」と言うことによって，女言葉を仕立てたのである。こうすれば，もはや男言葉ではない。男は，「ノイ」などという気弱な感じの文末詞を使用することはない。しかし，「ノイ」は滅多に使用されない。「ネー」の方が使いやすいのであろう。或いは「ノン」という格好な文末詞が存在する。女も男も「ノン」文末詞をこよなく好む。

(7)「ノン」

○ノン。ムカシデモ　ノン。おい。昔でもねえ。老女→老女，田原

○マズ　キータ　コタ　ナイ　ノン。まずは，聞いたことは無いね。老男→青男，豊橋市伊古部町

「ノン」は，成人が最も普通に使う文末詞である。女も男もこれを使う。ただし，若者は，「ノン」を避ける。若者も年をとれば，これを使うようになるのであろうが，若い間は，使わない。「ノン」は，地方色を濃厚に表す標識である。

(8)「ノンホイ」

○ナカジサワ　ナカナカ　ウタイシダ　ノンホイ。仲二郎様はなかなか上手な歌い手だねえ。老男→老男，中山

先の「ノーホイ」の場合と同じように，「ノー」でも「ノン」でもお構いなしに，「ホイ」という呼びかけ言葉を添加していく。この気さくさが，渥美半島地方の風土なのであろう。

(9)「ナー」

○マー　ソンナモンダ　ナー。まあ，そんなものだねえ。老男→青男，田原

「ナー」という文末詞は，求められての回答というのではなく，自分からひとりでに語る時のもの言いである。文例では，話し手が述懐する場面での文末に「ナー」が見られる。「ナー」は「ノー」に比べて品位が低い。相手への問いかけ文に「ナー」は使わない。関西弁では「ナー」の品位が低くないとされるけれども，渥美半島地方では，「ナー」の品位は高くないものと言えよう。

(10)「ナン」

○ミンナ　シバイオ　ヤロータガ　ナン。住民が皆，それぞれ，芝居をしたものだがねえ。老女→青男，福江

「ナ」を「ナン」に変えれば，品位も高くなり，使いやすくなる。女が頻りに「ナン」を使う。「ナ」はひとり語りなのに，「ナン」となれば，他人への語りかけ文に使われる。「ナン」は当たりの柔らかさを作るのに適している。「ナ」で済ませるところを「ナン」とN音を含ませることによって，穏やかな雰囲気が作られる。やさしくなる。

第二節　Noun 文末詞

名詞系の文末詞は，感動的な働きかけをする。本節では，二つの文末詞をとりあげる。一つは，間投詞の「サ」であり，これが文末詞として機能したものを言う。もともとは，名詞を作る接尾語であり，自立性の乏しいものである。

他の一つは，代名詞そのものが文末詞として機能した場合のものを指す。これらの二つは，極めて感情を揺さぶる働きの著しいものと言える。

(1)「サ」

○ソーデ　ナシニ　サー…。そうでなくて，さぁ。中男→中男，堀切

このような「サ」文末詞は，少ない。まだ，東京弁の「～さ，～さ，～さ。」という気障な感じの言い方は一般的ではない。上の例のように，中年層以下が「～サ」を使うこともあるが，稀である。ただし，簡潔さ，面白さ，著しさなどのような「さ」は，一般的である。しかし，まだ，「ええとサー，これからサー，…。」などの「サー」は少ない。

(2)「オノシ」

○ヤレ　ヤオノシ。やれよ，おい。中男→中男，堀切

上の例での「オノシ」は「お主」である。「お前」という意味であり，相手を指す語句である。その前の「や」も文末詞に含めるべきだとすれば，「ヤオノシ」を一体的な複合文末詞とすべきかも知れない。卑俗な感じが漂う文末詞である。滅多に聞かれない。勿論，

女が使う文末詞ではない。

以上で，愛想文末詞の記述はお終いである。愛想文末詞には，感性的なものが多かった。感性とは感声的なものでもある。声に重心がある。感覚的なものである。人を論理で納得させていくものではない。感情に訴えかけていくものである。話の接ぎ穂を指し示して，こまめに了解を求めていく作用がある。そんな言い方に，N音文末詞は，極めて好都合なものであったのである。

第三章　主体性文末詞

言語主体である話し手が，自己を何らかの意志により，文末部で意志表示を行うものと考えられる。すべて，言語の形に表現されたものは，話し手の意図を汲むことの可能なものであるが，取り立ててその徴表が際だたしいものの一群を，ここで記述する。

第一節　自我文末詞

「自我」とはエゴのことである。「自我」も「エゴ」も「自己」も「主体自身」も話し手のことである。話し手が，「おれが，おれが，…」と自分の立場を名乗る。名乗りが，文の冒頭に来れば，代名詞になる。その代名詞は，時に「俺は，わしは，私は，僕は，うちは，お母さんは，お祖父さんは…」のように多様な自称代名詞を形作る。しかし，文末にそれと同じく，主体表示をする際には，文頭での多様な代名詞をそのままの形で繰り返すことには，ならない。それらを集約して，単に，「ワタクシ」に相当する「ワ」/wa/系のものにまとめられる。このことは，一つ，注目してよいことである。統括作用が文末には作用するということである。

以下には，それでも，「ワ」/wa/のヴァリエーションが存するので，それらを記述することにしたいと思う。

(1)「ワー」

○ソヤー　エー　ワ。それは良いね。老男→老女，田原

言語主体の判断が優先的に言明された文だということである。そのような文の文末に「ワー」が付く。すなわち，このように「ワタシ（私）」は判断したのだということを，強いて述べきる。或いは，密かに私はそのように思うのですと，責任の所在を明かにしたとでも言いうるか。「ワー」文末詞は，別の意味で，大きな課題を提示していると思う。

(2)「ワイ」

○オバサン，テマノ　カカル　ヨナラ　エー　ワイ。おばさん，手間がかかるようなら，良いですよ，結構ですよ。老女→中女，赤羽根

文末詞の「ワ」が「ワイ」になるのは，先にも疑問の「カ」が「カイ」にもなるという例で説明した。優しさの鋳型として，「イ」の音が添加する。しかし，「イ」が必ずしも「優しさ」だけでなく，卑俗さをも含むことがある。意味は多様で，限定しにくい。ここでは，形を重んじている。「ワ」とも「ワイ」とも言うことをあげた。

(3)「ワイナン」

○イラゴワ　コノゴラー　エー　ワイナン。伊良湖岬は，（観光施設が整って）この頃は，結構だよね。老女→青男，福江

「ワイ」があれば，「ワイナン」もある。述部は皆，判断辞の「～エー」（良い）である。述部が，「エー（良い）」とか「アカン」とか「イカン」とかの言い方に偏っているのにも，注目してよい。方言の生活では，述部がこのような形式であることが極めて多いということなのである。感情や言語主体の判述の直接的表明がなされる場合が，多いのである。好きだ，嫌いだのの揺れで，物事が動いていくとも言いうる。

人間は感情の動物だといわれる。必ずしも根拠が明確でもないのに，判断が優先していく。そのような言語生活がある。

(4)「ワン」

○ナントモ　イッタ　コタ　ナイ　ワン。いやはや，行ったことは，無いねえ。老男→青男，豊橋市植田町

肯定や否定は，個人の大事な人間的行為の頂点的なものである。「無い」・「ある」や「やる」・「やらん」の判断にも，「ワン」が関わる。主体の直接的関与である。だから，「ワ」（吾，我）が言明される。そのような必然性が文法構造の上に，出ている。

第二節　断定文末詞

断定の助動詞に「だ，じゃ，や」がある。これに因んで，物事の判断を述べ記す言い方を問題とする。そのような文の文末に見いだされるのが，ここで取り上げる文末詞である。これらの文末詞には，他の品詞から転成した文末詞もある。単に断定の助動詞だけが含まれるのではない。

(1)「ダ」

○ヨワ　ナイ　ダ。弱く無いさ。老男→青男，豊橋市伊古部町

「ダ」は，助動詞の「だ」ではない。もともとの指定性はなくなっている。断定性もなくなっている。意味が軽くなり，文末に言い添えるだけの作用になっているのである。共通語での言い方に言い換えるならば，先の文例のように，「～さ」とか「～よ」に当たる。しかし，出自を指摘する伝統によれば，断定からのものなので，断定文末詞と呼ぶことにしたのである。

(2)「ダイ」

○アヤー　ドー　ヒト　ダイ。あれは，どういう人かね。老男→老男，小中山

上の例における文末詞の「ダイ」は，断定性というよりも，軽く事実を認定する働きと言うべきであろうか。しかし，名詞を承接した述語なので，形式的には，完璧な断定なのである。ところが，意味の上からは，共通語訳によって理解されるように，決して「～だ」にはなっていない。こういう点で，断定性を逸脱して，終助詞へ転成していったものだと言えるのである。最近の用語では，文法化と言うことになる。

(3)「ダニ」

○ナンシロ　ネー。コッチャー　マンダ　オッタダニ。いずれにしろねえ。こちらは，まだ，残っていたのよ。中女→青男，赤羽根

上の文で，文末の「だに」を「のよ」と訳した。「のさ」でも良い。「ダ」は，断定の助動詞というよりも，準体助詞の働きをしている。名詞なのである。だから，準体助詞の「の」に置き換えている。渥美半島では，「ダ」が共通語の準体助詞「の」に相当する。「ニ」は，逆接の意味は無い。もともとは，逆接の接続助詞であったのであろうけれども，今は，順接性しか持たない。

(4)「ジャン」

○カジヤデ　ネ。ツクル　ジャン。鍛冶屋で，さあ。作るよね。中男→青男，福江

上の例で見られるとおり，「ジャン」は，まだ，完全な終助詞になりきれていない。なお，原形の意味を引きずっている。しかし，ここでは，共通語に当てはめて，自然な言い方に分解してみたのである。

(5)「ズラ」

○アゲトク　ブン　ズラ。(誰かに) 上げておく物さ。老女→中女，田原

「ズラ」は推定の助動詞であり，遠州の「ズラ言葉」として，有名である。しかし，文中で使われる時には，推定の意味ではなく，「指定」の意味になっている。もはや，このような使い方であれば，助動詞と言うのではなく，終助詞と言うべきである。したがって，「断定」の意味の文末詞の中に入れたのである。

第三節　陳述文末詞

文中において，係り助詞の「ゾ」が係りの位置にあれば，それは，とても文末詞とは関係のないものである。しかし，その「ゾ」が文末に移動して，陳述の働きをするようになる。そして，陳述どころか，話し相手の機嫌を取ったり，待遇関係の維持に専ら，機能するようになる。こうした終助詞的な働きをとらえて，ここに，陳述文末詞という一群の領域を設ける。

(1)「ゾ」

○オレン　トコエ　キチャー　コマル　ゾ。俺の所へ来ては困るよ。中男→中男，堀切

上の例での「ゾ」は用言に続く「ぞ」なので，古来広く行われてきたものである。大野晋博士は，終助詞の「ゾ」が転じて係り助詞になり，係り結びの法則が確立したとの意見をお持ちである。ともかくも，今は，係り助詞と通い合う「ゾ」が，確実な終助詞的機能を担っていることを指摘するに留める。

(2)「ゾヤ」

○コマル　ゾヤー。困るよねえ。中男→中男，堀切

「ゾヤ」は「ゾ」に「ヤ」が複合して出来た一語の文末詞である。アクセントは，「ゾヤ」に覆い被さるようには付かなくて，「ヤ」の方に高さの山が来る。または，低平であるかのどちらかである。「ゾヤ」で共通語の「よ」にあたると考えてよい。勿論，意味は複雑なので，一つの典型的な場合を指摘したまでのことである。多様なのは，当然である。ただし，「や」が指定・断定の助動詞ではないということである。

(3)「ゾネ」

○ローニン　シタ　ゾネ。(あの子は受験に失敗して) 浪人したよね。老女→青男，小中山

「ゾネ」は，係り助詞の「ゾ」と終助詞の「ネ」との複合形である。ただし，「ゾネ」では，「ネ」の方に，アクセントの山が来る。

(4)「ゾン」

○ドー　シツラ。キョー　ミン　ゾン。どうしたんだろう。今日，まだ見ないねえ。中女→老女，

豊橋市伊古部町

先の「ゾネ」の場合と同じく，「ゾン」におけるアクセントの山は，「ン」の方に付く。しかし，「ゾン」全体に高さが被さる場合も，低平の場合も少なくない。

(5)「ゼ」

○アワノ　オカイ　クート　オナイダ　ゼ。粟のお粥を食うのと同じだよ。老男→老男，小中山

この「ゼ」は共通語の「ゼ」と変わりがない。「ゼ」が共通語でも，野卑なイメージで見られている。それと同じで，女が使うことは無い。「ゼ」は男向きの文末詞である。

(6)「ゼン」

先に「ゼ」は男向きの文末詞だと言った。それに対して，「ゼン」は女向きの文末詞である。丁寧さを醸し出そうとすれば，男でも使えなくはない。

○タノム　ゼン。頼みますよ。中男→中女，堀切

このような「ゼン」などというN音の響きを利用した文末詞で，男女に使用差が出ているのは，注目してよい。

第四節　述定文末詞

「述定」とは，文法用語でも，所々で見うけられる。自分の意見を述べることが主な働きである。ここでも，伝達の意図が明白なものを言う。特に，ヤ行音の「や，ゆ，よ」とア行の「エ」を含むことで，一群を作る。

(1)「ヨ」

○マタ　オクレン　ヨ。また，下さいね。中女→中女，赤羽根

「～よ」という文末詞を使用する場面は，非常に多い。話し手の立場を述べる時に，なくてはならない終助詞である。判断でも立場でも，事態でも，述べきった最後に，「よ」を付ける。すると，話し手の意見になる。責任の証しとして，「よ」を探すこともある。「行けないヨ」と言えば，「ヨ」は主体の表明になる。「赤いヨ」と言えば，赤いと認識した返答になる。「ヨ」は，言語主体の立場を点的に指示したことになる。

(2)「ヤー」

○ハガイー　ヤー。はがゆい（もどかしい）ねえ。中女→中女，赤羽根

この例での「ヤー」は，終助詞である。断定の助動詞ではない。仮に断定の助動詞が文末詞の働きをなすとすれば，「ダ」になるはずである。「ヤ」にはならない。しかし，文脈の上から，「ダ」にはならない。「ヤ」になる必然性がある。この「ヤ」には，心情のやるせなさ，という深意が汲み取れる。疑問形での「ヤ」は親しみの気持ちが入っている。だから，「カ」や「カイ」，「カン」などの文末詞とは自ずから違う。

(3)「エ」

○ゴクローサマ　エ。ご苦労様でしたねえ。老女→家の者，小中山

上の例では，「エ」が親族への言い方になっている。「エ」は，最高の敬意を示すもののはずである。渥美半島地方では稀な言い方である。この文末詞は，尾張藩の言い方として有名である。

(4)「エン」

○オロイトクレ　エン。（車から）降ろしてくださいよ。老女→中男，赤羽根

述定の「エン」ではあるが，共通語の訳では，「～よ」と「～ね」との二つがあてられる。

(5)「エンホイ」

○あの人は，キラダ　カエンホイ。あの人は，出身が吉良地方だったかねえ。老男→老男，中山

以上で，述定文末詞の記述を終える。「何々だヨ」と言い終える時の「～ヨ」にあたるのが，これらの述定文末詞である。使用場面が多繁である。

第五節　逆説文末詞

逆説の接続助詞であるところの「ガ」を主体とした文末詞の一群が，これに属する。ここでは取り上げなかったけれども，電話の応答で「…ですケド」と言うのがある。こんな逆説形式の文末詞も特定化されれば，ここに所属することになる。

(1)「ガ」

○フン。イヤー　ヒン　ガ。ええ。言いはしないよ。老女→青男，小中山

逆説とはしたが，決して，反対の意味は出ていない。「慎み深さ」の表明という程度の意味になっている。「ガ」という押さえが効いているので，有頂天に賛成しているという意味でなく，少しの否定的抗議がこめられていることを匂わせる働きをすることになる。共通語の「ヨ」をあててはみたが，両者には，大きな質の相違がある。

(2)「ガイ」

○タマニ　カイー　クル　ガイ。時折，買いに来るよ。中男→青男，堀切

「ガイ」は男っぽい文末詞である。男が男にたいして使う。決して，女は使わない。使えば，粗野な感じになる。名古屋弁の特色を指摘する時に，「そうだギャー」などと言うことがある。この「ギャー」は，「ガイ」/gai/又は「ガヤ」/gaja/における連母音の相互同化によるものである。広く愛知県地方に見られる。日本の各地に存する現象で，珍しいものではない。

(3)「ガヤ」

「ガヤ」には，抗弁の意味がこめられる。

○コスイ　ガヤ。狡いじゃないか。子供男→子供男，堀切

「ガヤ」には，不平や不満のこもった感じでの物の述べ方が見える。

(4)「ガン」

「ガン」はよく使われる文末詞である。N音の効果を活かしている。相手への優しいイメージで使われる。老若男女の区別なく用いられる。逆接の接続助詞の「が」が，文末詞化したものである。

○マタ　キタ　ガン。また来ましたよ。老女→青男

嫌われるかも知れないことを承知で，このようにしつこさを笑いに変えて，あっけらかんとして，言う。こんな時に「ガン」は最適である。

強い主張が述べられる時に，「ガン」はうってつけの文末詞である。一癖も二癖も表示できるからである。単純に言いきらないで，意図があり，あとに思いが残る気持ちを，「ガン」に託している。

第六節　言い差し文末詞

もの言いの途中で止め，その後の言葉をうやむやにして，最後までは言わないことにする。言わないままで，言ったことよりも，多くの中身を伝えたことになる。そのような定型的な言い方がある。その文末に，一定の形を作る文末詞の一群がある。

(1)「ケド」

○ウマカー　デキヤ　セン　ケド。上手にはできないもの…。老女→青男，小中山

「ケド」は勿論，逆接の接続助詞である。しかし，これは，必ずしも逆説の意味ではなくなっている。文の意味は，上手にできないけれども，何とかできるという意味でもない。慎み深さを前面に出すための言い方と判断すべきものであろう。それは，共通語での逆接の接続助詞による言い差し文末詞の場合にも言えることである。言い差し叙法と言うべきものである。

(2)「モンダイ」

順接の「から」に相当する接続助詞が，文末詞の働きをする。

○イマン　トコ　ナイ　モンダイ。今のところ，無いよ。老男→青男，堀切

「モンダイ」はたいてい，理由や原因についての説明をする文に使用される。したがって，「～だから」と訳しても筋は通る。しかし，普通の述部を締めくくる時の言い方で，「～さ」とか「～ね」と訳してみると，少し，違和感が無いわけではない。自然な共通語の訳にするためには，まだ，原因や理由の意味を残した「～だからね」の方が自然と言えるようである。このあたりが，言い差し叙法の妙味である。

(3)「モンデ」

○オソガイ　モンデ。怖いさ。中女→中女，電話。福江

これも，原因や理由を述べる言い方の最後につく文末詞である。文末詞になりきれていない場合も少なくない。その言い差し叙法が，もどかしさ，にえきれなさをよく表すことになる。

(4)「モン」

○ホヤー　オイデトッタ　モン。それは勿論，いらしていたよ。中女→青男，豊橋市伊古部町

「モン」は「物」である。「ものだから」の略でもある。簡潔な形なので，原因や理由を述べる接続助詞の意味が薄れている。

(5)「デ」

原因や理由に関わる接続助詞に「デ」がある。この「デ」が文末詞的に作用することがある。文末で，原因や理由をのべる機能が言い差しになる。

○マットレ　ヨ。オレ　ヤル　デ。待っていろよ。俺がやるよ。子供男→子供男，堀切

この「デ」は，「～だから」と訳した方が素直な場合もある。しかし，自立性が高ければ，文末詞の「よ」にあたると見てよい。

○タカケヤ　マケテ　モラウ　デ。値段が高ければ，負けてもらうよ。老女→老男，田原

「デ」の言い差し叙法は，話し手のレトリックを巧みに表している。

以上で文末詞の記述を終える。渥美半島方言の文末詞は，多彩である。今回は，従来の藤原与一博士の分類案とは別に，新しい分類案を提案してみた。コミュ

ニケーションの立場で思案してみたのである。その案に基づいて文末詞を分類し，記述した。歴史的な変化をも考慮に入れつつ，しかも，意味機能本位に「会話機構」の仕組みを優先して構想してみたつもりである。

チョムスキーを真似た内省本位の意味分類の案は，必ずしも客観的な記述には相応しくない。また，方言という地域間の比較を必要とする言語現実においては，主観的な意味分類は避けた方がよい。ただし，形式を大切にすることは大事であるが，歴史的な分類だけでは不満足になるであろう。文末部で，相手への訴えかけの頂点において，どのような表現意図の分類を体系化するかが問われる。

他方，次の問題がある。一方言社会で，百以上の文末詞が存在することは少なくない。これらを適切に分類することは至難の業である。文末詞体系とそれらの変化との釣り合いをどのように図るかという点が，課題である。それらの調和を考えることは，極めて大切な仕事である。多くの人の合意が得られるような会話機構の体系案が期待される。なお，本稿の提案は，一つの挑戦案である。この分類案は，方言毎に異なっていて当然なので，個々の方言に応じた個性的な分類案が別に生まれることが望ましいのである。